

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K17881

研究課題名（和文）中学校体育における学習意欲を促す動機づけ雰囲気の実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Motivational Climates for Motivating Learning in Junior High School Physical Education

研究代表者

中須賀 巧 (Nakasuga, Takumi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：10712218

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中学校3年間にける体育授業における動機づけ雰囲気と学習意欲の関係について検討することを目的とした。予備研究として体育授業における生徒の様々な心理的側面を検討した。3年間の縦断研究では、中学生を対象に4ヵ月間のインターバルを取りながら9回調査を実施した。主な結果は、熟達・協同雰囲気は学習意欲を向上させ、成績雰囲気は、学習意欲を低下させ、不安を高めることが確認された。介入研究では、体育授業における熟達雰囲気が学習意欲に及ぼす影響を検討し、熟達雰囲気が生徒の学習意欲を向上させた。以上、ことから、体育授業における中学生の学習意欲は熟達雰囲気や協同雰囲気によって向上することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの動機づけ雰囲気や学習意欲に関する研究では確かめられてこなかった発達段階という観点から学習意欲の変化や体育授業に求められる雰囲気づくりが明らかとなった。特に中学生段階において、多くの研究で示されてきた意欲的側面の低下を防ぎ、なおかつ向上させる要因に熟達・協同雰囲気が貢献できることを確認した点に学術的な意義がある。また学習意欲向上に必要な熟達雰囲気や協同雰囲気づくりでは、教師の生徒への期待や感情を高めるような発言を充実させることが大切であることを実践研究を通して明らかにできた。これらの成果を通して、体育学習の指導法や雰囲気づくりに有用な知見を提示できたことの社会的意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the relationship between the motivational climates in physical education classes and students' motivation to learn during three years of junior high school. In a three-year longitudinal study, junior high school students were surveyed nine times with an interval of four months. The main results showed that a mastery climate and cooperative climate increased the students' motivation to learn, while a performance climate decreased their motivation to learn and increased their anxiety. In the intervention study, the effects of a mastery climate in physical education classes on students' motivation to learn were examined, and a mastery climate improved students' motivation to learn. The results of this study showed that the students' motivation to learn in physical education classes was enhanced by the mastery climate and cooperation climate.

研究分野：体育心理学

キーワード：熟達雰囲気 成績雰囲気 協同雰囲気 体育授業 学習意欲 発達段階

1. 研究開始当初の背景

学校教育活動では、子どもの「学習意欲」を高めることが急務である。この学習意欲とは、学習活動を自発的かつ積極的に取り組み、学習行動を生起させようとする内発的および外発的な心理的エネルギーである(西田, 2004)。特に体育授業場面における学習意欲の欠如は、中学校期から顕著に現れ(西田・西田, 1990)、体力低下、社会性や規範意識の鈍麻、運動実施頻度の二極化促進など重大な教育問題を引き起こす根幹となる。したがって、健やかな心身を保ち、豊かなスポーツライフの実現を目指す中学校体育において、生徒の学習意欲を促す授業展開が強く求められる。

これまでの体育における学習意欲研究に残された課題として、体育における学習意欲研究を概観すると、達成動機づけ理論をベースに意欲的側面(5 下位尺度: 学習ストラテジー、学習の価値、学習の規範的態度、困難の克服、運動の有能感)と回避的側面(2 下位尺度: 緊張性不安、失敗不安)からなる尺度開発に始まり、学習意欲がもたらす教育効果(体育の成績、学習行動など)や発達段階毎の学習意欲の特徴など様々な知見が蓄積されており、生徒の学習意欲を向上させる重要性(意義・メリット)は概ね確認できる。しかし、同一の生徒を対象にした学習意欲の経時変化やその向上を促す体育授業の展開については十分に検討されているとは言えない。体育授業では何に価値を置いた指導(努力や出来栄)なのか、どのような評価基準(絶対的・相対的評価)なのか、どのような志向(記録更新好みか競争好み)のかなど様相の異なる授業雰囲気が存在する。これらのことから、どのような様相の授業雰囲気が、学習意欲の向上に関わるのかを厳密に検討することが必要であり、残された課題と言える。

ところで、近年の体育授業の雰囲気測定として動機づけ雰囲気が注目されている。この動機づけ雰囲気とは、重要な他者(教師及びクラスメイト)がつくる環境の構造(雰囲気)であり、成績雰囲気(他者との比較を通しての達成を重視する雰囲気)と熟達雰囲気(学習や熟達のプロセスを重視する雰囲気)に、新たに協同雰囲気(仲間との協同体験に価値が置かれ、生徒間の相互作用が重視される雰囲気)を加えて、3つの側面から授業雰囲気を構造的に捉えられるものである(伊藤ほか, 2013)。体育授業における動機づけ雰囲気に関する国外研究は、欧米の体育心理学者を中心に進められてきた。そこでは体育授業における動機づけ雰囲気と、授業満足感や内発的動機づけ、授業の退屈さなどとの関係について検討した横断研究から、変数間の因果関係について検討した縦断研究まで、より実践場面を重視した知見を積んでいる。その知見では、体育授業の雰囲気は体育学習を促進する熟達雰囲気と、抑制する成績雰囲気が二者択一されることを報告している。この成果はスポーツに対する意識や教育文化などの背景の違いから、万国共通の理解や子どもへの適用が困難とされ(西田ほか, 2009)、わが国でも国外研究を基礎に体育授業における動機づけ雰囲気研究を独自に進めている。中須賀とその共同研究者(2016, 2017, 2018)は、体育授業の動機づけ雰囲気がもたらす教育的効果(生きる力、結果予期、授業満足感など)について検討し、その中で熟達雰囲気や協同雰囲気が学校教育にとって極めて有効なことや新知見として成績雰囲気が生徒の成長に対して部分的に必要なことなどを指摘してきた。このように体育授業における動機づけ雰囲気は教育現場への活用可能性を備えており、学習意欲との関係を調べることで、学習意欲向上に有効的な指導方法や授業設計を明確にできる概念と考えられる。

しかし、体育授業における学習意欲を扱った国内研究の多くは横断研究から得た成果である。これは変数間の位置づけは明らかにできるが因果関係の特定には至らないため、教育現場への即効性に欠けることが指摘され続けてきた。また従来の横断研究を通して動機づけ雰囲気に基づく授業実践の必要性は訴えられてきたが、実際の授業展開に説得力のある提言が十分にされておらず、その実現には至っていない。したがって、本研究では横断研究だけでなく、因果関係の特定に対して説得力のある説明ができる縦断研究(量的データ)と調査では賄えない教師の発言や行動など授業への介入研究(質的データ)を併用した相互補完的なアプローチによって、体育授業における動機づけ雰囲気と学習意欲の関係について検討を進めていくこととした。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究では、特に体育授業の専門性や独自性が高まり、学習意欲の低下時期として中学生を対象を絞り、体育授業における動機づけ雰囲気が、どのように「学習意欲」と関連するのかを量と質のアプローチから慎重に検討を行い、そこから得た結果に基づいて教育現場に学習意欲向上を促す授業展開例と指導法を提案することとした。そして本研究を遂行するにあたり以下の3つの研究目的を設定した。

(1) 体育授業における学習意欲に関連する予備調査研究

学習意欲の基礎的なデータを得るための予備調査として4点を進める。予備調査とでは特に体育の学習ペースに抑制効果を示す可能性がある回避的側面に着目し、運動有能感との関係や体育授業に対する好意度ならびに適応感との関係について検討することを目的とした。予備調査は体育授業における動機づけ雰囲気、集団凝集性、学習意欲の関係が授業内で経験する種目によって異なるのかを検討することを目的とした。予備調査は体育授業における生徒の授業前の行動様式が学習意欲とどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的に進めた。

(2) 縦断調査による動機づけ雰囲気と学習意欲の因果関係の検討

中学校入学時から卒業時まで3年間の成長段階ごとに追跡した縦断データを基に、体育授業における動機づけ雰囲気と学習意欲の因果関係について解明することを目的とした。

(3) 学習意欲向上を意図した動機づけ雰囲気に基づく体育授業実践

学習意欲向上を意図した動機づけ雰囲気に基づく体育授業を実践し、量と質の両データから学習意欲の向上に有用な体育授業の雰囲気を解明することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 中学校体育授業における学習意欲に関連する予備調査研究

予備調査では学習意欲の回避的側面である学習不安と生徒の運動有能感との関係を検討するために質問紙調査を実施し、収集した2時点の縦断データをもとに仮定した交差遅れ効果モデルを共分散構造分析によって解析した。また予備調査では体育授業の回避的態度として劣等コンプレックス、体育適応感、体育授業に対する好意度の関係を検討するために質問紙調査を実施し、3者間の関係を共分散構造分析によって解析した。続いて予備調査では質問紙調査によって収集したデータを基に体育授業における動機づけ雰囲気が集団凝集性を介して、それが学習意欲に影響を与えるというモデルを設定し、4種目間(ゴール型、ネット型、武道、ダンス・体操)でのモデルの異質性(等質性)を検証するために多母集団同時分析を行った。最後に予備調査では体育授業開始前の行動(各クラスの生徒が授業開始の集合場所に集まってくる様子を撮影)が早かった早群と遅かった遅群に分類し、体育における学習意欲得点を比較した。

(2) 縦断調査による動機づけ雰囲気と学習意欲の因果関係の検討

中学生を対象に、体育授業における動機づけ雰囲気測定尺度(伊藤ほか,2013)と体育における学習意欲検査短縮版(西田,2013)からなる質問紙調査を2017年から3年間にわたり9回実施した。初回から9回目の調査までのすべての質問紙調査に回答し、なおかつデータに欠損がなかった者を最終分析に用いた。調査対象校はすべて3学期制であり、各学期に1回のペースで調査は行われた。収集されたデータの分析は、潜在成長曲線モデルを援用して行った。図1に示す切片は1時点目の測定における初期レベル(初期値)を意味し、傾きは測定間隔ごとにどれくらい対象となる変数の値が変化するか(増加率)を表すものである。そして学習意欲の各下位尺度得点と動機づけ雰囲気の各下位尺度得点の因果関係を検証するため、両得点の潜在成長曲線モデルを組み合わせた(図1)。例えば、動機づけ雰囲気の熟達雰囲気得点の切片から学習意欲の学習ストラテジー得点の傾きに対するパス、学習ストラテジー得点の切片から熟達雰囲気得点の傾きへのパス、熟達雰囲気得点の切片から学習ストラテジー得点の切片へのパス、熟達雰囲気得点の傾きから学習ストラテジー得点の傾きへのパスを仮定したモデルである。このモデルを基に動機づけ雰囲気や学習意欲の各下位尺度の組み合わせを変えながら分析を進めた。

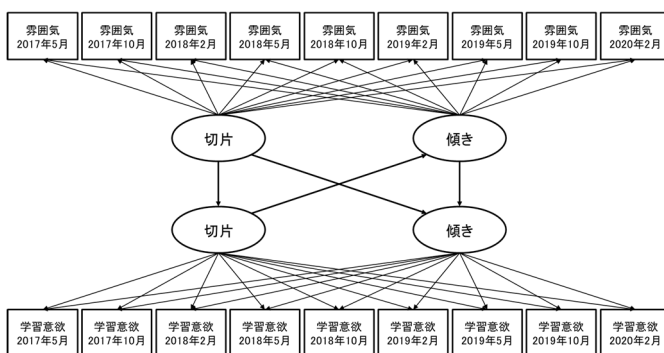


図1 潜在成長曲線モデルを組み合わせた分析モデル

(3) 学習意欲向上を意図した動機づけ雰囲気に基づく中学校体育授業の実践

中学校に在籍する生徒(Aクラス33名,Bクラス32名)を対象に、中学校の状況を優先しながら、実践研究を行った。熟達雰囲気と協同雰囲気が学習意欲の向上に有効なことが縦断研究を通して確認されたため、それらの雰囲気を強調するような授業雰囲気づくりを進めた。各クラスの教師には授業内の発言をICレコーダで記録してもらった。対象中学校は、男女別習の体育授業であり、単元は男子のゴール型サッカー(全8回)であった。Aクラスを担当する教師は教師歴14年の男性、Bクラスを担当する教師は教師歴10年の男性であった。対象者には縦断研究時と同様の体育授業における動機づけ雰囲気と学習意欲の尺度からなる質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 体育授業における学習意欲に関連する予備調査研究

予備調査の主な結果は、身体的有能さの認知(単元前)から緊張性不安(単元後)に有意な負のパスが認められた。失敗不安(単元前)から身体的有能さの認知(単元後)に有意な負のパスが認められた。失敗不安(単元前)から受容感(単元後)に有意な負のパスが認められた。以上のことから、身体的有能さの認知を高めることが緊張性不安を抑制できることが示唆された。また失敗不安の抑制が身体的有能さの認知や受容感の向上に重要になることが示唆された。

予備調査の体育授業に対する好意度、回避的態度、適応感の関係について検討した結果、1点目は、体育授業への好意度が体育授業への仲間との良好な関係や授業の理解度を高めることが示唆された。2点目は体育授業への好意度は運動から回避しようとする態度や仲間から注目さ

れることをプレッシャーに思ってしまう態度を抑制する効果があったことが示唆された。結論として、生徒が体育授業に意欲的に取り組めるようになるためには、技能向上を目指して努力することやその過程に注意が向くような熟達雰囲気や協同雰囲気を強調し、生徒の体育授業に対する好意度を高めることが大切になることが明らかとなった。

予備調査の主な結果は、ゴール型やネット型の球技種目では、熟達雰囲気や協同雰囲気が学習意欲を高めることが確認された。一方で武道やダンス・体操といった採点型では熟達雰囲気が回避的な行動や思考を高めることが明らかとなった。成績雰囲気に関してはすべての種目において回避的な行動や思考を高めることが明らかとなった。このことから、体育授業中に経験する種目の違いによって動機づけ雰囲気の認知の仕方は学習意欲に異なる影響を与えることが示唆された。

予備調査の主な結果は、回避的側面の得点は男子と女子ともに遅群が早群より有意に得点が高いことが認められた。これは、遅群の男子と女子ともに授業に対して不安を抱えている可能性があることを示唆している。一方で学習に対して積極的に関わろうと考える意欲的側面の得点については、男子の遅群が最も高く、次に女子の早群と男子の早群、そして女子の遅群が最も低いことが明らかとなった。これは、集合場所に集まってくるのが遅いからといって必ずしも意欲的に取り組む傾向が低いとは言いきれないことが示唆された。

(2) 縦断調査による動機づけ雰囲気と学習意欲の因果関係の検討

3年間の動機づけ雰囲気の各雰囲気の得点と学習意欲の各下位尺度の得点との因果関係について、両得点の潜在成長曲線モデルを組み合わせたモデルによって推定した。主な結果は、以下の6点であった(図2)。1年生の時点で熟達雰囲気や協同雰囲気を強く認知していた場合、学習意欲の意欲的側面(学習ストラテジー、学習の価値、学習の規範的態度、困難の克服)も高い傾向にあり、緊張性不安や失敗不安などの体育学習に対する不安傾向は低いことが明らかとなった。1年生の時点で成績雰囲気を強く認知していた場合、緊張性不安や失敗不安などの体育学習に対する不安傾向も高く、運動の有能感を除く、意欲的側面(学習ストラテジー、学習の価値、学習の規範的態度、困難の克服)が低い傾向にあることが確認された。中学校3年間を通して、熟達雰囲気や協同雰囲気を生徒が強く認知していた場合、運動の有能感を除く、意欲的側面(学習ストラテジー、学習の価値、学習の規範的態度、困難の克服)が向上する可能性があることが確認された。中学校3年間を通して、成績雰囲気を生徒が強く認知していた場合、緊張性不安や失敗不安などは向上するが、意欲的側面は低下することが確認された。ただし、意欲的側面の一側面である運動の有能感は向上する傾向にあった。1年生のときに意欲的側面の学習の価値が高い生徒ほど2年生、3年生のときに熟達雰囲気や協同雰囲気の得点が高まること明らかとなった。1年生のときに成績雰囲気を強く認知している生徒ほど2年生、3年生のときに運動の有能感が向上する傾向があることが確認された。以上のことから中学校3年間にわたる長期間の調査を通して、特に意欲的側面の向上には、熟達・協同雰囲気を強調することが重要であることが示唆された。また成績雰囲気の認知は、学習意欲全般を低下させるだけでなく、不安傾向を高めることも確認された。ただし、運動の有能感に限っては、成績雰囲気が一部必要になる可能性があることも示唆されたが、成績雰囲気を強調することには体育学習を抑制する効果も備わるため慎重になる必要がある。

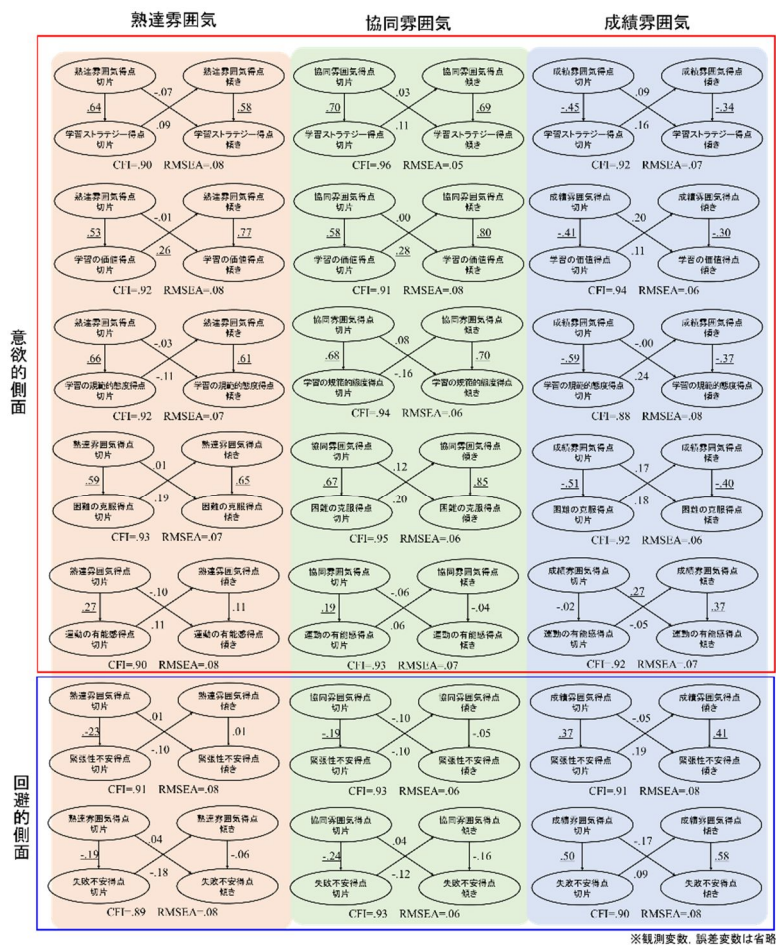


図2 動機づけ雰囲気と学習意欲の潜在成長曲線モデルの分析結果

(3) 学習意欲向上を意図した動機づけ雰囲気に基づく体育授業実践

主な結果として3点が明らかとなった。1点目としてAクラスの生徒の方がBクラスの生徒よりも熟達雰囲気や協同雰囲気をやや強く認知している傾向があった。2点目としてAクラスの生徒には、熟達雰囲気を認知しているほど意欲的側面が高まる傾向があったが、Bクラスの生徒には、動機づけ雰囲気の熟達、協同、成績雰囲気と学習意欲の意欲的、回避的側面との間に関連性は示されなかった。3点目としてAクラスの教師の方がBクラスの教師よりも体育授業中における7つのカテゴリーの総合発言数の比率が高く、中でも目標提示、助言、KR(結果を述べること)に関わる発言の比率が高かった。本研究で対象としたクラスは、同様のサッカーの学習を事前に決められた過程で進められており、双方の授業内容に大きく異なる点はなかったものと考えられる。しかし上記の1点目や2点目のようにAクラスの生徒とBクラスの生徒に雰囲気認知に関する得点差や変数間に異なる影響性が確認された。そのような結果が確認された背景として、3点目にもあるように、体育授業中の教師の発言数が異なったことが影響しているのではないかと考えられる。Aクラスの教師の発言数が多く、これは4大教師行動の一つである生徒との相互作用が充実していた可能性がある。多くの体育授業に着目した動機づけ雰囲気研究では、熟達雰囲気の効果が確かめられており、授業雰囲気づくりとして一定の有用性が支持されてきた。体育授業において熟達雰囲気を強調することと合わせて、その中で教師は生徒の期待や感情を高めるような発言をより充実させることが大切になる。また教師の発言数が少ない場合、熟達雰囲気と意欲的側面との双方が独立関係になる可能性があり、本来の熟達雰囲気に備わる学習を促進させる効果が失われる恐れがあることには注意しておく必要があるだろう。

(4) 得られた成果の国内における位置づけとインパクト

本研究における成果は国内学会(日本体育学会、現:日本体育・スポーツ・健康学会)で発表し、多くの先生方から様々な質問や意見をいただき、本研究への関心の高さを肌で感じた。特に中学校3年間を通して収集したデータを用いて体育授業における動機づけと学習意欲の因果関係について検討した研究は、国内外を通じても実施されていない極めて珍しいものであった。また3年間にわたる中学生を対象にした測定データそのものにもオリジナリティがあった。

そこで示された本研究の成果の全ては、これまでの動機づけ雰囲気や学習意欲を取り扱った研究では明らかにされなかった発達段階という観点から学習意欲の変化や体育授業に求められる雰囲気づくりについて、新たな知見を学校教育現場に提示することができた。特に小学校とは異なり、体育専科教師が担当し、クラス単位での授業の機会が減少し、合同クラスでの授業が始まることなどによる中一ギャップを招くことになる中学生段階において、多くの研究で明らかにされてきた意欲的側面の低下を防ぎ、なおかつ向上させる要因に熟達・協同雰囲気が貢献できる可能性があることを確認した点は体育心理学をはじめとする当該研究領域ならびに学校教育現場にインパクトを与え、その学術的意義は大きいと考える。さらに量的データで確かめた学習意欲向上に必要な熟達雰囲気や協同雰囲気づくりにおいて授業実践への介入研究を行ったことで、保健体育教師の生徒への期待や感情を高めるような発言を充実することが、熟達・協同雰囲気と学習意欲の関連性をより強くすることが明らかとなった。

以上のことから、体育授業において認知されている動機づけ雰囲気が学習意欲の向上・低下にいかに関与を示しているのかについて研究者や教員に周知していくための基盤となるエビデンスを構築することができた社会的意義は大きいと考える。

(5) 今後の展望

本研究の成果によって、生徒の学習意欲を促す体育授業における動機づけ雰囲気について説明することができた。また学習意欲の低下を回復・向上させる授業設計や指導方法について、成長段階の特徴からも明らかにすることができたと考えられる。しかし、令和の日本型学校教育にもあるように、認知スキルでは測りきれない非認知スキルの存在や自ら進んで学習に取り組む態度の向上など学校教育現場には喫緊の課題が多々ある。教育活動の一つである体育学習がそれらの課題にどの程度貢献することができるのかを今後も検討していくことが必要になる。

<引用文献>

- 伊藤豊彦・磯貝浩久・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・渋谷崇行(2013)小学校の体育学習における動機づけモデルの検討:動機づけ雰囲気の認知,学習動機,および方略使用の関連. 体育学研究, 58(2): 567-583.
- 西田保(2004)期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院
- 西田保(2013)スポーツモチベーション-スポーツ行動の秘密に迫る!-. 大修館書店
- 西田保・西田紀江(1990)体育における学習意欲の発達の推移. 総合保健体育科学, 13(1): 47-54.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生(2015)体育授業における動機づけ雰囲気が生徒の結果予期に与える影響. 体育学研究, 60(2): 759-772.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生(2017)高校体育における動機づけ雰囲気および目標志向性が生徒の体育授業満足感に与える影響. 体育学研究, 62(1): 281-296.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生(2018)体育学習における動機づけ雰囲気,目標志向性,生きる力の因果関係の推定. 体育学研究, 63(2), 623-639.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 中須賀巧, 田中輝海, 阪田俊輔, 大橋充典, 山本浩二, 杉山佳生	4. 巻 45
2. 論文標題 中学校体育授業における運動有能感と学習不安との関係 - 2波のパネルデータによる因果関係の検討 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 健康科学	6. 最初と最後の頁 61 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 榎本雄一, 中須賀巧	4. 巻 13
2. 論文標題 体育授業における動機づけ雰囲気と目標志向性を基軸とした生徒の社会的スキル向上要因の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校教育コミュニティ	6. 最初と最後の頁 21 - 27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中須賀巧, 竹内掛, 山本篤司	4. 巻 64
2. 論文標題 体育授業における教師の発言が動機づけ雰囲気と学習意欲に及ぼす影響 - 中学1年生男子に着目して -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 當山貴弘, 中須賀巧, 杉山佳生	4. 巻 67
2. 論文標題 中学生の体育授業に対する好意度と体育適応感との関係 - 回避的態度を媒介としたモデルの検討 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 687-697
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中須賀巧	4. 巻 74
2. 論文標題 体育・スポーツ活動における目標設定の理解と指導の工夫	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫教育	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎本 雄一 , 中須賀 巧	4. 巻 35
2. 論文標題 中学校体育授業における心理社会的スキルと学習方略との関係 - 目標志向性の認知の違いに着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 當山貴弘, 中須賀巧, 八尋風太, 杉山佳生	4. 巻 34
2. 論文標題 中学生の体育授業における回避的態度と学習方略	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 131-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本雄一, 中須賀巧	4. 巻 34
2. 論文標題 中学校体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルとの関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 151-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山根佑景, 中須賀巧	4. 巻 32
2. 論文標題 中学校体育における生徒の勤勉さから見た援助要請と失敗観の関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 91-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今田有香, 中須賀巧	4. 巻 第31巻
2. 論文標題 中学校体育における原因帰属様式, 授業満足感, 学習意欲の関係	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 79-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 當山貴弘, 中須賀巧	4. 巻 第31巻
2. 論文標題 中学生の体育授業における日標志向性について 運動有能感得点と劣等コンプレックス得点の比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 前田凜太郎, 中須賀巧
2. 発表標題 授業開始前の行動が学習意欲の認知と運動技能に及ぼす影響について - 長距離走における体育授業に着目して -
3. 学会等名 兵庫体育スポーツ科学学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中須賀巧, 大橋充典, 田中輝海, 阪田俊輔, 山本浩二
2. 発表標題 中学校体育における動機づけ雰囲気と学習意欲の因果関係の推定
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富山貴弘, 中須賀巧
2. 発表標題 体育授業における思考・判断力が劣等コンプレックスに及ぼす影響-体育授業に対する感情側面に着目して-
3. 学会等名 九州体育スポーツ学会第68回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富山貴弘, 中須賀巧
2. 発表標題 体育授業場面における劣等コンプレックスと学習方略の関係-体育授業の好嫌に着目して-
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中須賀巧, 筒井茂喜
2. 発表標題 体育授業における動機づけ雰囲気, 集団凝集性, 学習意欲の関係 -多母集団同時分析による種目間の検討-
3. 学会等名 日本体育学会第69回
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 國部 雅大、雨宮 怜、江田 香織、中須賀 巧	4. 発行年 2023年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 256
3. 書名 これからの体育・スポーツ心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------